

泌 尿 器 科 紀 要

第 8 卷 第 1 号

昭和 37 年 1 月

随 想

アレルギーについての一考察

大阪医科大学長 松 本 信 一

実験的皮膚科学の研究対象となるものは、課題の何であるかによつてむろん異なつてゐる。皮膚自体であり、又は粘膜面でもある。時には人間のそれ、また時には動物のそれが選ばれるであらう。後者の場合はなるべく人間に似るものを採択するのが望ましいが、人間でできない実験は、これを動物試験に委ねる外はない。

動物皮膚と人間皮膚は、その造構の上からも また機能の上からも、著しく異なり、動物といつても高等のものから下等のものまで広い範囲に亘るから、研究目的の如何によつて適当かつ合目的なものの選択が必要であり、しかもその結果をすぐさま人間にあてはめるには慎重であらねばならぬ。又アナロジーの觀念に捕われ過ぎてはならぬ。

簡単な話が、たとひ高等動物皮膚に於ての化学的物質による変化と 人間皮膚の化学的物質による湿疹様皮膚炎とを対比することは一応よいとして、成立機構の遙かに複雑と思われる湿疹の病理考察にあてはめようとするには とかく無理のあることによく留意せねばならぬ。

尤もこの複雑な機構を分析し綜合して考察をするために、關係ある一連の実験觀察によつて検討を重ねるのであるということを よく意識しての手段であれば、それは結構であるどころか当然である。

他方、微妙な皮膚または上皮細胞の謎を解くためには できるだけ分析し、それも なるべく簡単な条件下にまでほりさげて究明するのが賢い方途である。例えば生態上皮機能の考察を兩棲動物の蛙、いもりやさんしょう魚の角膜上皮とか、その体外培養法を応用しての觀察や、更には単一上皮細胞の態度乃至は細胞集団の生態の把握などは、上皮細胞というものの知見を豊富にするために資するところが多い。内被細胞、纖毛上皮などの觀察また然りである。

この意味では膀胱や尿路系粘膜上皮の体外培養に於ける所見は興味がある。神経からも血管からも離断された上皮が営む生きものとしての動作を見るとステレオトロピズムやヘモタクシスを考える上の理解にも役立つ、またいくたの示唆が得られ、生きた細胞というものはこんなものかと驚きもし 教えられるところも多い。このことは創傷の治癒機転や腫瘍細胞の態度の考察にも役立つのである。

さて、凡そ膀胱粘膜面は吸収能を営むものか否か、以前から数多の実験的研究が施され攻究が重ねられている。が往々この種の実験では健常な状態か否かを区別せずに取材されているようである。粘膜の傷面、糜爛、又は炎症局所となることは容易に肯かれる。もしも健全と認められる粘膜がたやすく吸収するとあつては、本来の機能から見ておかしいことで、 実際上にも困りものである。何が吸収され、何は吸収されないか知りたいものである。

臨床家は必要上から使用する諸々の局所麻酔薬がここから吸収されることをよく知つている。話

は古くさいが、有機銀剤なども反復注入すると銀症の起ることでもわかるが、それは叙上のように健康粘膜の場合か否かに問題がある。ヨード剤やサリチル酸剤などの吸収されることも周知の通りである。

そこで次の問題は、その吸収は膀胱からか、尿道からかの点になる。実地上には何れでもよいとしても、動物実験でこれをやつてみると可なりのところまで成績がでる。即ち、適当な動物に手術を加えて、膀胱、尿道などを別々に吸収能を検べる手もあるが、あまりに実験想定を利巧にやりすぎると、ややもすればそれにこだわる希望的の結果が出たり、又は膀胱尿道の吸収という条件付きの試験の目的とはちがつたことをやつている場合もある。

何かわかり易く、膀胱からの吸収を見せる手段はないものかの解答に対して、格好の鋭敏な固定薬疹（例えばアンチピリン疹）について試みると興味ある成績が得られはしないか

それには、予め仔細な検尿などによつて膀胱粘膜面に微細な破綻もないことを立証する。次いで、泌尿器手技の熟練者が、少しも無理せずに、適当なカテーテルを膀胱の真中に挿入して、叙上薬疹誘発薬液を静かに注入する。すると敏感さに応じて固定薬疹は反応して間もなく発痒、発赤を来すのである。まさしく膀胱の吸収を立証するものであり、尿道についても、この試験はできるが、反応度の鈍い固定薬疹ではそううまくはいかないのはもちろんである。

次いでカテーテルを静かに抜きとり、精密検尿してこの手技によつて粘膜面を損傷しなかつた確認をするというのが手順である。これ以上に粘膜を傷つけなかつたことのきめ手は先ずむづかしいのではないか。むろん尿路粘膜にも薬疹の現われる可能性も念頭においてかからねばならぬ。

この試験では 薬疹という特別限定のある場合を採つて例にしたのではあるが、粘膜面の吸収を短的に立証した点では間違なく、又過敏現象とも関連して興味ある問題を提供している。

なお、薬剤の種類によつて、吸収に難易の別あることは勿論であり、又特異体質の関与することはいふまでもない。

蛋白様物の吸収が案外微量なことは別に証左がある。